Comparative Economic Studies

ISSN 1340-5659

比較経済体制研究

2014 第21号

特集 産業・企業からみる中国経済の発展

編集代表　伏田寛範・柳原剛司・横井和彦・横川和穂

GISデータを用いた中国の製造業立地の空間構造分析　藤井　大輔
中国における第二世代イノベーションにかんする実証分析　三竝　康平
中国における産業立地—分散か集中か—　小林　拓磨

改革開放35周年の八面紅旗（2013年12月　中屋信彦撮影）

比較経済体制研究会

≪特別寄稿≫

知性の遍歴についての風変わりな回想

――経済学の状況に関する問い――

ヤーノシュ・コルナイ／ベルナール・シャバンス
（訳：北川　亘太）

ヤーノシュ・コルナイへのインタビュー

ヤーノシュ・コルナイはハーバード大学とブダペスト・コルヴィヌス大学の名誉教授である。1928年に生まれ，1950年代初頭にマルクス主義のジャーナリストであった彼は，1956年のハンガリー革命のあと周縁に押しやられ，教えることを禁じられていたものの 1960 年代初頭に研究者としての経歴を再開した。彼は，新古典派に依拠した研究を通じて西側で知られるようになり，そうした時代を経て，『反均衡の経済学』（1971）において新古典派理論の批判的分析を展開した。次いで分析の焦点は社会主義経済に当てられた。その分析の成果が，東側と西側に影響を及ぼした『不足の経済学』（1980），及び2番目の傑作である『社会主義システム』（1992）である。彼は1986年にハーバード大学の教授になり，一年のうち半分をそこで仕事をする時間に，もう半分をブダペストでの研究生活に充てた。ハーバードを2002年に退職した彼は，同年から2011年にかけてブダペスト高等研究所（Collegium Budapest, Institute for Advanced Study）の名誉研究員を務めた。1989年の社会主義システムの転換後，研究の焦点は，ポスト社会主義世界におけるシステムの変化に当てられた。そうした著作が，『資本主義への大転換』(1990)，『本道と脇道』*Highway and Byways*（1995），『苦悩と希望』*Struggle and Hope*（1997），『移行期における福祉，選択，連帯』*Welfare, Choice, and Solidarity in Transition*（カレン・エッゲストンとの共著，2001），『社会主義から資本主義へ』*From Socialism to Capitalism*（2008）である。2013年12月には，資本主義についての著書『ダイナミズム，競争，余剰経済』*Dynamism, Rivalry, and the Surplus Economy* が出版された。自伝『コルナイ・ヤーノシュ自伝――思索する力を得て』（2006a）[i]は，広く称賛された注目すべき本であり，この自伝は，フランス語訳 *À la force de la pensée, Autobiographie irrégulière*, L'Harmattan, 2014 として間もなく出版される。このインタビューでは，とりわけ自伝の中で論じられた問いに言及する。

I. システム・パラダイム

本誌（『レギュラシオン・レヴュー』，聞き手：ベルナール・シャバンス）

あなたの業績は，ご自身が「システム・パラダイム」と名づけたものに対する多大な貢献です[1]。このパラダイムがもつさまざまな特徴をどう定義されますか。このパラダイムがなぜ重要なのでしょうか。それは過去150年間の経済思想の中で重要な役割を果たしてきたにもかかわらず，今や周縁に押しやられた分野のように思えるのはなぜで

しょうか。

ヤーノシュ・コルナイ

最も重要な特徴は，システム・パラダイムという名前から明らかです。この手法をとる人々は，大きく複合的な有機体，つまり複雑な構造をもつ組織により大きな関心をもっています。すなわち，システムの部分よりも，むしろシステム全体に関心をもっているのです。各部分はどのように影響を及ぼし合うのでしょうか。各部分は，相互に結びついている構成要素間の物質と情報の流れをもつシステムをどのように生じさせるのでしょうか。そういった問いが，システム・パラダイムの観点から考える人々が答えを探し求めている問いなのです。

私はある人々の見解をシステム・パラダイムという表現と結びつけようとしています。そのうちの何人かについて語ることは，この用語を理解する助けになるでしょう。それは，アダム・スミス，マルクス，ミーゼス，ハイエク，シュンペーター，カール・ポラニーです。このリストに含まれるのは，思想（idea）の歴史における偉大な人々です。彼らの政治的立場や価値体系はもちろんお互いに全く違いますが，彼らの分析は極めて重要な特徴を共有しています。彼らの関心は，個々の問題に対してではなく，「巨大なシステム（great system）」，つまり，社会主義と資本主義，国家と市場についての全般的かつ総合的な理論にあるのです。

私は，このシステム・パラダイムを部分的な分析にとって代わるものとして発展させているのではないのです。というのも，無数の「ほんの小さな」問いについて注意深く研究することが必要なのは確かなことだからです。しかし，それでもなお明らかなのは，モザイクをなすさまざまな断片が無数に合わさっても，それ自体では全体像にならない，ということです。だからこそ，綜合的なアプローチ，つまり多くの部分から構成される全体というものを明らかにしうる「ヴィジョン」が必要になるのです（私はこの意味でのヴィジョンという用語をシュンペーターから採りました）。

私もあなたと同じく，このシステム・パラダイムという意図をもった研究が周縁に押しやられたという印象をもっています。そうなったのにはいくつかの要因がありますが，そのうち一つだけをとりあげたいと思います。それは，「大問題」を扱う研究を嫌悪し，さらにはそうした研究をにべもなく軽蔑するという専門家集団における風潮です。ある有名なアメリカの経済学者は，個人的な会話の中で，自らの研究上の抱負をこう言いました。「皆でこの建物に一つのレンガを加えよう。それは少なくとも目に見えてわかる貢献なのだから。巨大で複雑な殿堂を素描するために苦闘するのはかえって良くない」。研究者は根拠にもとづいた厳密かつ明確な答えを出すことができる問題だけを提起すべきである，という見方が広く行き渡っているのです。きっちりと証明することのできる回答をなしえない課題を設定することは価値が無い，という見方がそれです。たとえその問いが刺激的で重要なものかもしれないとしてもそうなのです。しかし，巨大なシステムをめぐる，その重苦しい難問は，私たちの周りに放置されています。科学的な手段と直感を組み合わせてその問いに取り組んだり，少なくともそれに知的な解を与えようとする試みを誰もしないのであれば，それは残念なことです。多くの経済学者が理論的分析という目的のために数理モデルを考案しつづけ，自らの主張を立証するために計量経済学の手法を用いることを，私は多大な重要性をもった進展であると認めます。残念に思うのは，一部の人が成功したことで厚かましくなり，自らが用いる手段では厳密には検証しきれない問いを考える人々を軽んじることです。

II. 主流派と多元主義の要求

本誌

あなたはよく，片方の足を主流派経済学の内側に，もう片方をその外側に置いているというふうにご自身の立場を規定しています。この経済学の世界おいて、今日観察されるのは、その分野を「規格化（normalization）」しようとする傾向の加速です。重大な失敗をし，誤った針路をとっても，大勢に影響はないようにみえます。この傾向を特徴づけるのは，形式化と数量化へのもっぱらの準拠，同時代ならびに歴史上の現実との関係性の希薄化，他の社会科学からの決別（経済学の帝国主義化のかたちで現れるかもしれません），哲学的または倫理的な基礎づけの欠如，過度に単純化されバランスを欠いた論文採択基準，たいてい引用指標だけに限定される論文の質の査定です。主流派経済学の，強力な還元主義的かつ独占的な傾向への反発として，異端な思想をもつさまざまな潮流から，多元主義を要求する声があがっています。あなたはこの多元主義の要求という観点から，こういった状況をどのようにお考えですか。

ヤーノシュ・コルナイ

あなたはそれぞれ正確な解答を必要とする5つか6つの質問を今の質問の中にまとめていますね。

あなたは，質問の中で「独占的な傾向」という微妙な表現をしています。幸運なことに，民主主義世界に適用される厳密な意味でのイデオロギーの独占というのは決してありません。私は数十年，共産主義者による独裁のもとで暮らしてきまた。ですから私は，一つのイデオロギーが独占を保持し，その排他的な地位を有することの意味に迫ることができました。その地位は，政治権力とそれが専有する組織化された物理的な力とによって押しつけられたものです。主流派経済学は，この意味での独占を保持してはいません。主流派以外の思想をもつ学派を擁護する人たちは合法的に出版することができます。現に，彼らは自らの専門雑誌をもち，その著書は出版されていますし，彼らのうち少なからぬ人々が大学で教えています。かりに市場構造という語彙で始めるならば，このように続けられるでしょう。つまり，私たちが目の当たりにしたのは寡占市場の構造であり，そこでは，思想と知識に関する市場が単一の学派によって強固に支配され，その競合者たちには，相対的にほとんど余地が残されていないのです。

これは，決して政治権力や組織化された物理的力によって強いられるイデオロギーの独占の問題ではなく，明らかに，さまざまな間接的メカニズムによってもたらされる優勢の問題です。年長の主流派経済学者たちは，学問の世界に引き込み昇進させる対象として，自らと同様の見方をする若者を選びます。実際，主要なジャーナルに採択され，公表される論文は，そういった若者の論文なのです。その論文は，彼らの研究者としての経歴に強い影響を与えます。けれども，これらすべての意見は適切な表現にされなければなりません。つまり，主流派の人々は（排他的にではなく）優先的に指名されますし，彼らの研究も優先的に公表されるということです。このサークルの外部に留まることは不可能ではありませんが，そうする人々は遥かに多くの障害に直面します。

私は，主流派経済学の声明や方法論に対しても，その基礎にある科学哲学に対しても，さまざまな異論をもっています。そのことについては後ほど述べます。対話の手始めに，いくつかコメントをしたいと思います。それは，理論の問題に関することではなく，理論を生み出し，その方法を適用する人々の態度と精神構造に関することです。

いかなる学派も，現象についての申し分なく完璧な説明を有していませんし，有したためしもあ

りません。このことから，科学の良心的な擁護者はみな，控えめで謙虚な人物にならざるをえません。もし他の研究者や他の学派の一員が結局は正しかったならばどうなるでしょう。もしその人物が，私が認識していなかったことをすでに知っていて，理解していたならばどうなるでしょう。主流派経済学を擁護する者の多くは，自信過剰と自己満足の傾向にあります。多元主義，多様性，競争は，政治学でも，経済学でも，思想の領域においても同様に必要とされます。芸術や哲学の対象となる事柄であろうと，厳密な意味での科学的な研究の対象となる事柄であろうと，手法やパラダイム，学派の間での競争や多元主義は，発展のために不可欠です。主流派の第一級の人物にとって，多元主義を支持するのは望ましいことでしょう。私自身の幸運な経験に照らすと，その中でも特に偉大であるアロー，クープマンス，サミュエルソン，ソローは，そうした寛大さをもっていましたし，彼らの発想を批判するよう私や他の人々に勧めていました。むしろ学派間の競争状態を嫌がる傾向にあるのは，どっちつかずの中間的な地位にある人物のほうです。

主流派経済学を熱烈に支持する二流の者からもたらされる害悪の良い例を，東欧の経験は示しています。1989年・1990年よりも前，共産圏において西側の主流派経済学を強く支持する者が何人かはいました。けれども，この学派の影響力がすさまじい速さで増したのは，国家に保証された，公式のマルクス・レーニン主義イデオロギーの独占的地位が突然瓦解した，政治体制の大転換以後です。本格的な同時代の現代経済学が意味することを経済学者たちが熱心に学習する傍らで，不幸なことに，狂信者も現れました。それは，ハンガリーの諺にあるように「ローマ教皇よりもローマカトリックの」教授，研究者，政策立案者です。つまりは，彼らは多くの西側の同業者たちよりも独善的で教条主義的であるということです。公表された論文が主張しているのは，標準的で伝統的な市場経済とは異なるシステムを研究するための新しい思想，概念，分析道具を発明する必要などないということです。異なるシステムとは，例えば，古典的な社会主義，修正社会主義，社会主義後の転換，新興市場などです。彼らはこう提案します。主流派経済学の教科書の中にある，旧来からの良く知られた手法をただ引き継げばよい。そうすれば，古い現象であれ，新しい現象であれ，生きているところがいつ，どこであれ，あらゆる現象を理解するための手法が手に入る，と。この態度は，経済思想の刷新，新奇性，独創性をとりわけ強く必要とする時に，出来合いの思考パターンを機械的に模倣するという知的怠慢をもたらします。

私は，質問の別の箇所，つまり経済学と他の社会科学との関係についても応答したいと思います。一方で，ほとんどの経済学者は，「隣接する」分野，とりわけ社会学，政治学，歴史学の発見と方法論を十分に用いていません。この孤立を，例えば，引用の分布に見てとることができます。他方で，（あなたが質問の中でそれとなくふれたように），「帝国主義的な」野心が経済学にみられます。それは，驚くほど積極的に拡張して経済学の物の見方と方法論を他の社会科学にもちこみ押しつけようという強い欲望です。もちろん，そのような「帝国主義」には二つのグループが必要です。それは，征服者と征服に自ら進んで従う人々です。政治学または社会学の雑誌においていっそう頻繁にみられるようになったのは，経済学者からその理論と合理的選択という概念装置とを継承し，政治学や社会学の同僚にそれらを押しつけようとする編集者と査読者です。しかし，完全なる支配は，心の中の判断や不本意さに反しても，奴隷のように順応することができる人々が存在していなくては成り立ちません。例えば，服従した人々が固執する

のは，手本となる計量経済学の計算を，それらの理論的手法に十分な説明力のない実証に用いることです。彼らは，いくぶん専門内の，あるいは，専門外のその計算を，巧みに，あるいは，拙くこなすのです。

本誌

あなたは自伝の中で，早くも1971年の『反均衡』の中で行った新古典派理論への根本的な批判を思い起こしながら，また，新たな批判的見解を付け加えながら，ラカトシュの用語を引き合いに出してこう書きました。「それは退行的科学プログラムではなく，存続能力を残したものであった」[2]。しかし，実のところ，新古典派理論はラカトシュのいう退行的科学プログラムと似ているのではないでしょうか。退行的とは，次の状況を指します。すなわち，プログラムの説明力は拡大しないまま，その堅い核（ハード・コア）は長きにわたり揺さぶられ，補助仮説の発展が主導権を握ってきたけれども，その覇権は何らかの前進的科学プログラムの出現によって未だ挑戦を受けていない。この意味で，このプログラムは依然として「存続可能」ですが，「前進的」ではありません。この区別に同意していただけますか。

ヤーノシュ・コルナイ

経済学という専門家集団のこうした知的な状態について，私は一方的な評価を行いたくありません。私は主流派経済学を批判的に捉えていますが，それを柔軟性を欠いたもの，「思わず吹き出してしまうようなもの」，不動のものに分類したくはありません。主流派経済学は，知の地平に現れるいくつかの新しく興味深い発想を受け入れ，「正典として認めた」とでもいうように，必修のシラバスの中に位置づけています。そうした受容が起こった例として，情報という概念とそれに密接に関わる諸研究が挙げられます。心理学から借用して主流派経済学に取り入れた期待という現象もそれに当たります。

私は二分法を，つまり科学的プログラムが発展するか退行するかを決めるために「二つのボックスの一方にチェック・マークをつける」評価を，どのようなものであれ受け入れません。そういったものは強すぎる意見であり，十分に調節されていません。意見のなかには中間的で混合されたものがあります。主流派経済学の歩みは，マルクス主義者の政治経済学が経験した意味では退行していません。マルクス主義者の政治経済学は，「マルクス・レーニン主義」の名の下で共産主義独裁のための公式のイデオロギーになったときに，ソビエト圏内でまさしく退行したのです。主流派経済学は発展しますが，十分な速度で発展するのではありません。主流派経済学は部分的に開かれていますが，もっと開放的であってもよいはずです。主流派経済学は開放性を妨げる多くの力，すなわち，知的怠慢の芽生え，同じことを繰り返し主張する傾向，新たな発想に対する嫌悪感をもっています。結局，主流派経済学は，決定理論という特殊なモデルに，つまり合理的選択モデルに囚われているのであり，それを普遍的な説明としてみなしているのです。

主流派がいくつかの全く新しい発想を受け入れたその時から，「正統な」経済学の思想と「異端な」それとを区分する線を引くことは難しくなりました。この区分は移動しています。かつて（私が『反均衡』を書いていたときと言わせてください）行為主体間の利害対立を強調する思想は，その時はまだ主流派の外にありました。今日，ほとんどの経済学研究者がこぞってゲーム理論のモデルを活用するなか，そうするのはほとんど普通のことです。

誰しもが異なる区割りをします。私の観点でひ

ときわ重要な基準は，研究者が採用する決定理論のミクロ的基礎づけが何であるかをはっきりとさせることです。個人が一貫した選好順序を有し，効用関数を最大化し，最適な決定に至ることが出発点なのでしょうか。(いくつかの例外を伴いつつ)そうだとするならば，その人は主流派に属します。この仮定にこだわりがないとしたら，その人は，おそらく（確実にではないですが）幾分かまたはすっかりと主流派との関係を断っています。

主流派の規律を課そうとする厳しい教師がいます。あなたが何を言おうと，そのような教師は，例えば主題がマクロ経済の変動であってもインフレーションと失業の相互関係であっても，あなたのミクロ的基礎づけが何であるかを提示するのは必須であると断言します。そして，あなたの提示したものがミクロ的基礎づけとして受け入れられるのは，以下の場合に限られます。それはあなたの提示したものから，自己の利益に従って最適化する意思決定者たちがどのように私たちがマクロレベルで経験する状態に寸分たがわず至るのかを推論できるかということです。もしその教師がそのようなミクロ的基礎づけをあなたが提示できていないという結論をくだしたならば，あなたの論法は場当たり的（アド・ホック）であり，真の経済学として見なされることは決してありません。

けれども，いくつかの懐疑的な問いが当然ながら浮かんできます。その意思決定者がいつも合理的であるとはいえないならば，何が起こるだろう。その人が自身の長期的な利益に反して短期的な利得を好んで行動するならば，何が起こるだろう。あるいは，もしその人の選好が急なパニックに駆られて突然変わるならば，どうなるだろう。もし，根本的に異なる意思決定の状況，つまり，そこでは既定の選好などなく，その意思決定者が行き当たりばったりでやらなければならない状況が生起するならば，どうなるだろう。ここで私が述べているのは，標準的な意思決定モデルが機能しない意思決定状況のあらましなのです。

ああいった教師の厳格な見方と眉をひそめるさま，こうして理論の境界を恣意的に確立すること，こんな具合に場当たり的なものを鼻であしらうさまは，多くの人を怖がらせることで，自主的で公正な研究をし，独創的な発想を普及させることから遠ざけます。ですが幸運にも，このようなやり方がすべての人を遠ざけるわけではありません。

この領域において強く必要とされているのは，知の多元主義です。そのことは先ほど議論しました。公理主導の選好順序というこの一般的でない特殊な理論に対抗して，より完璧に近い，より真に普遍的な理論を打ち立てるのは不可能です。人間行為と人間関係の計り知れないほどの多様性は，普遍的な意思決定モデルを考案することを不可能にしています。さまざまなモデルは，さまざまな行動特性を強調し，その特性から結論を引き出します。それと同時に，重要ないくつもの特徴が無視されます。なされるべきはこれなのであり，これこそが普通なのです。私にとって，それは素晴らしいことでもあります。というのも，学者はそのおかげで，個々の参加者たちを動機づけるのは何かという問いを提起することなく，さまざまなマクロの過程を記述し，しかも，その過程についての優れた分析的研究を企てることができるからです。

III. 思想，利害，制度

本誌

あなたは，思想のもつ力を強調しています。このことは，あなたの自伝のタイトル『思索する力を得て』に反映されています。この自伝の中で経済学において非伝統的な思想の前に立ちはだかる障害を論じるとき，あなたは「新しい理論は，よ

りうまく使えるという説得なしに，古い理論にとって代わることはない」[ii]と述べています。利害と思想の，歴史の中での相対的な役割は，論争の的です。ウェーバーはこう述べました。「人間の行為を直接に支配しているのは，(物質的ならびに観念的な）利害であって，思想ではない。それにもかかわらず，『思想』によってつくりだされた『世界像』は，あたかもレールを切り替える者のように，きわめてひんぱんに，レールの方向を決定し，そのレールにそって利害のダイナミズムが人間の行為をおしすすめてきたのであった」[iii]。ケインズは「思想がだんだん浸透するのにくらべれば，利害の力は大いに誇張されている」[iv]と主張しました。経済学という私たちの分野では，次のことを考慮するとき，利害と思想の相互作用は無視されえません。それは一方で，主流派の理論と（大学組織，経済学者間や学派間の競争形態，学者の任命の様態，専門家集団の組織形態への）その理論の制度的な埋め込みとの関係であり，他方で，ここ数十年の金融の役割によって典型的に示されるように，しかるべき経済システムにおいて進化しつつある利害の重要性です。

ヤーノシュ・コルナイ

二つの問いを区別させてください。一つは，経済における現実の行為主体を動機づけるものは何か，もう一つは，経済を記述し分析する研究者と教授を動機づけるものは何か，という問いです。

前者を取り上げると，私は，人々が主に彼らの利害によって動機づけられると言明することを偏った意見であるとみなします。この言明は，かねてから問題あるものになっています。というのも，一人ひとりが，相反することが多いさまざまな「経済的諸利害」を有しているからです。それは，うたかたの利益，短期の利益，長期の利益でしょうか。ひとりの人間がいくつかの機能を果たすかもしれません。その人は，企業の被用者，家事使用人の雇い主，貯蓄から購入した株式の所有者，あるいは，金融「投機家」にもなり得ます。ひとりの人間が，合法の経済，違法に近い経済，闇経済に，同時に関与するかもしれません。成功を，お金や獲得した権力，名声，評判で測りますか。私の自己利益を厳密に順守しますか。それとも，近親，あるいは，より範囲の広い一族の自己利益に目を向けますか。このように，私たちは「利害」の定義にてこずるのです。

さて，思想の役割に入りましょう。ベルトルト・ブレヒトによる発言がたびたび引き合いに出されます。「まず食うこと，道徳はその次さ」[v]。このことがすべての者に，つねに，当てはまることなど決してありません！　あなたがケインズから引用した言葉が，人々の賢い知恵を示しています。あらゆる心理学者，歴史学者，著述家にとって明白ですが，思想のもつ力を見くびるのはとんでもないことなのです。マルクスとエンゲルスは彼ら自身の経済的利害によって行動に駆り立てられたのでしょうか。私はそのすべての例を列挙したくありません。私にとって自明なのは，人々が併存する諸利害によって動機づけられるということです。ある利害が，ある時は他の利害を強化し，またある時はそれを妨害し，そうして，いずれかの利害が優越します。諸利害の無数の組合せは，こうした複雑な結合効果を作り上げます。この組合せは，個々の人生において各人が多様な行為をなす中で，やがて変化するかもしれません。

同様のことが，経済学研究者からなる特定の集団についても言えます。もちろん，ほとんどの人は，聖人ではなく，ある学問上の地位にあることに大きな喜びを感じます。だからこそ，彼らは「支配集団」と強く結びつくのです。もっと密接な結びつきがみられることも珍しくありません。専門家集団の長が大企業の取締役や顧問の地位に，あ

るいは企業の所有者にすら結びつけられているならば，その結びつきがその経済学者の考え方に良くも悪くも影響を与えるでしょう。とはいえ，そのような諸要因を背景に経済学者の学派間でなされる議論の軌跡を追い求める，科学を社会学的に分析する者はみな，良い仕事ができません。『反均衡』の中でさえ，私は，共産主義システムのもとで教えている理論史家たちの公式見解に異を唱えました。彼らは，一般均衡理論に「資本主義的（ブルジョア）」という烙印を押しました。より一般的にいって，私は，主流派の経済学者を資本主義の伝道者や擁護者とみなしたり，異端派の経済学者を資本主義に批判を加える者や徹底的に反対する者とみなすのを正当だとは考えません。経済学者の科学に対する哲学とその人の政治的姿勢を結ぶそのような単純な等号などないのです。

経済学者，理論歴史学者，社会学者が共同で研究する必要があるのは，経済学を扱う人々の間で，思考，忠誠心，学派の発展に経済的利害と思想がどのような影響を及ぼすのかという問題です。これは刺激的な実証課題です。この課題は，過度に単純化した定式や前提条件に縛られることなく，公平に取り組まれるべきです。

本誌

システム・パラダイムは，経済理論における制度的な考えと強く結びついています。このことは，あなたの最高傑作である『社会主義システム』の中で明示されています。私は，例えばですが，さまざまな調整メカニズムに着目するあなたの手法を強調したいのです。システムの変化や「移行」といったことは，主流派経済学がおそまきながらも制度的方向へと転回した要因となりました。この転換は，両義的な結果を招きました。一方で，「制度が重要」という考えは，確立された見方に組み込まれていきました。この考えは，しばらくのあいだ流行になっていました。他方で，厳格に演繹主義的な見方は，資本主義経済における調整や発展にかんする大きな問題に対する効率的な解決法としての，個々の「良い制度」にかんする研究というものを発展させました。「質」の高い制度を探すなかで，数えきれないほどの計量経済学上の「比較」研究が完全に見逃していたのが，ある国の特定の状況に置かれている諸制度の歴史的な相互依存（親和性または補完性），すなわち諸制度のシステム的文脈への依存です。あなたがこれまで長い間貢献してきた経済学における制度的アプローチの正統性の獲得には，良い面も悪い面も現れてきていますが，それについてはどのようにお考えですか。

ヤーノシュ・コルナイ

私は，制度学派や私自身の研究によって提示された分析手法は，社会主義の崩壊や資本主義への移行，新しいシステムの発展といったことを客観的に検証し，それらの実証的な記述と分析を示そうとする人々に有用であると考えます。いささか皮肉なのは，西側から来た，かつて母国において主流派の数理モデルを講義し，貴族的な軽蔑をもって制度主義者をより低い階級に属する者として退けていた有名な教授が，自らのスーツケースの中に自身が母国で使っていたであろう一連の道具さえ入れていなかったと分かったことです。ここで彼は滞在した国々の首脳や一般市民と話すことで，それらの出来事を異なる見方で捉える必要があると実感しました。ひとつは，政治，経済，文化の制度です。これらが決定的な役割を果たしました。もうひとつは，事実に寄り添った説明です。そうするには，人々の行動の背後にある現実の力，すなわち，動機の多様さや行為の「不均質さ」を取り上げるほかありません。そうしたものは，理論モデルの中であまりにも不用意に見落とされて

います。私には個人的な報酬がありました。そう感じたのは，例えば，私の研究をほとんど知らなかった同僚たちが「ソフトな予算制約」[vi]を概念体系に適用し始めたのに気づいたときです。西側において公表された，東欧の移行についての報告は，そのほとんどが，この表現を用い，それゆえ，この表現から多くの関連する経済政策上の帰結を引き出していたように思えます。

そうして考えると，前述のもう一つの質問へと論点が移ります。つまり，何をすべきか助言を求められたときに経済学者はどのように振る舞うべきでしょうか。社会的厚生の最大化は，かなり弱々しい「最適基準」です。この基準から実際の経済政策上の帰結が演繹的推論をもって引き出されることは決してありえません。経済学者は自分自身に対して，あるいは経済学者に耳を傾けるかもしれないしそうではないかもしれない一般大衆に対して安心を与えるために，「専門家」や「官僚」という名前のもとに自分たちは価値中立的な提言ができると言って自らを欺いているのです。世界中のどこにも規範的分析に価値中立的な結論をもつものなど存在しません。ある一連の価値観にもとづいて良し，あるいは最善とされるものも，他の価値観に照らしてみれば十分に良いとはいえず，むしろ有害であるとされます。ついでながら，成功した政治家たちは，このことを意識的または本能的に感じとります。だから彼らは，自らの好みに合わせて助言する人々だけを助言者として採用するのです。

IV. ケインズについて考える

本誌

あなたは，自らの思想に影響を与えてきたとして，マルクス，シュンペーター，ケインズ，ハイエクという偉大な，しかし幾分か相反する四人組について言及しています。私の受けた感じでは，マルクス，シュンペーター，ハイエクは，あなたの研究に刺激を与えた者たちですが，その一方でケインズの位置は極めて具体的です。あなたは，資本主義と失業との構造的連関を彼と共有しています。あなたは，この連関に，社会主義と不足との構造的連関を対比させています。この2つの構造的連関の対置は，『不足の経済学』の中心をなしています。しかし，この極めてはっきりとした対比は，資本主義自体を，考えうる他のシステムより悪くないけれど，きっと最善の秩序ではないと評価することのようにみえます。そのため，「矛盾とジレンマ」というあなたの切り口は，（効率性と道徳という）価値観の間の避けられない緊張というケインズの見方と似通っているようにもみえます。この緊張は，受け入れられる妥協点を模索することにつながるものです。こうした見方は，「良いことはみな共に進む」[vii]（ハーシュマンからの引用）という普遍的な見方や厚生経済学における最適性という概念に対抗するものです。

ヤーノシュ・コルナイ

偉大な人物の一覧に読者の注意を向けてくださり，ありがとうございます。4人全員が私の世界観と思想に深い影響を及ぼし続けています。あなたは特にケインズから得たひらめきについて尋ねています。それについてあなたがおっしゃったことは，全くその通りです。

あなたがふれたように，『不足の経済学』は，社会主義がもつ不足の特徴と資本主義がもつ失業の特徴を，一対の対照的な特徴として扱いました。本書の書評の中には，私が提示したシステム像を，ケインズ経済学の「鏡像」とみなすものがありました。あたかも鏡の中に自分自身の反転した像をみるかのようである，というのです。

間もなく，オックスフォード大学出版局から，

私の新著『ダイナミズム，競争，余剰経済』が出版されます[viii]。この新著で私が詳しく論じているのは，失業に関するケインズの理論がいかにして労働市場と財・サービス市場に関する私自身の見解と結びつくのか，という点です。ケインズと他のマクロ経済学者の多くは，超過供給と超過需要の周期的変動に注目しました。そう理解するのも無理はありません。私は「巨大なシステム」の永続的特性に主な関心をもっています。これは，私の生涯にわたる関心事なのです。私の考えでは，不足は社会主義というシステムに固有の永続的特徴であり，反対に，過剰，つまり財・サービスの多大な過剰生産能力と多量の在庫は，資本主義というシステムに固有の永続的特徴なのです。

少しの間、話がそれることをお許しください。あなたが質問の中でケインズの理論上の発想にふれたときに私が思い起こしたのは，ケインズが経済政策の立案における実務的役割を受容したことと私の活動との間にある違いです。私は自伝の中で，先に述べた二つの特徴の対比と同じように，そうした比較を試みました。ケインズは，彼の理論を言葉にするだけでなく，経済学者の専門家集団，政治の意思決定者，一般大衆に，彼の考え方を納得させようと注力しました。私はケインズに敬服します。つまり，彼の根気強さ，柔軟性，外交感覚に感嘆するのです。私の経歴は，ケインズとは異なるものでした。私は異なる状況のもとで生まれ，私の性分も同様に異なっています。ケインズは，首相や財務大臣と昼食をとり，彼らが何をすべきかを納得させたことでしょう。名門校の卒業生，ケンブリッジの学者，そして，ブルームズベリー・グループの一員であったケインズは，自国では高級なイギリス政治の領域にいました。私は，ハンガリーの政治サークルにおけるばつの悪いはみ出し者として動いていましたし，未だにそうなのです。

ケインズは幸運な国に生まれました。彼と政治家たちや一緒に食事をする人たち，会話の相手との間にはいつでも色々な論点が横たわっていましたが，物事を考えるうえでは，彼らは民主主義を無条件に尊重し，政治的な価値観の基盤を共有していたのです。私のような中央ヨーロッパの経済学者の立場とは，そういった点についてもあまりに異なっていたのです！　私は，1955年に研究経歴を歩みだした時から数えて，19人の首相と24人の財務大臣の政権下で生活してきました[2]。数十年間，上層部の政治家の世界観は，私のものと著しく対立していました。そのような状態は，小さく見積もっても1989年から1990年にがらりと変わりました。ハンガリー第三共和国が存続したその後20年間，政治家たちと経済学研究者としての私はバリケードの同じ側に立っていましたし，両者とも，民主主義，法の支配，資本主義市場経済を信じていました[3]。こうしたことが親密な関係につながる可能性はあったものの，実を言うと，その可能性が実現されることはほとんどなかったのです。決定権をもつ政治家のほとんどが，私の意見に興味をもちませんでした。なぜなら，彼らは，自らの意図に私の意見がそぐわないであろうと推測したからです。幸運にも，彼らのうち私を昼食に招待する者などいませんでしたし，もしいたとしても，私はうまくはぐらかしたでしょう。私がいっときのあいだ共感した高級政治家は一人か二人いました。共感したのは，人として，彼らの活動に対して，あるいは，彼らの綱領の少なくとも一部分についてです。しかし，彼らが私に意見を尋ねることは極めて稀でしたし，ある問題や他の問題について私の提言を例外的に採用することはもっと稀なことでした。付け加えると，私は唱道者がもつ熱情や専心の気持ちを欠いていました。そういったものがもしあれば，私にこうささやいたかもしれません。「間違いなく，私は何がなされ

るべきなのかを知っている。だから意思決定者に私の提案が正しいことを納得させるまで，休むわけにはいかない！」と。私は政治家に助言を求められることがなかったので，政治家に迎合するために自らの道を外れることもありませんでした。今ここで自らの人生を振り返ってみると，自らの経歴が辿った道を悔やむ時もありましたが，振り返って満足をおぼえる時もあります。ここで再び，選好順序の理論について一般的な理論の水準で述べたことの個人的な例を挙げます。自らの行為を回顧するたびに，私は一貫した判断を下してはいません。というのも，同じ決定空間における私の選好順序が日によって全く異なっているからです。つまり，私が上機嫌であり，自らの過去の行動を誇らしく振り返るときの順序と，私が不機嫌であり，自らの過去の行動を悔やんでいるときの順序は，全く異なっているということです。

V. 民主主義，成長，相反する評価

本誌

あなたのいう価値の序列の中では，民主主義と自由は経済「実績」を構成するさまざまな側面よりも高い評価を得ています。あなたの資本主義と社会主義システム群の歴史的・理論的な比較評価において，政治的側面は，厳密な意味での経済的側面よりも重要であるようにみえるかもしれません。同様に，システムの主要な因果連関についての理論において，あなたは，資本主義にとっても社会主義にとっても，システム構造における第一の「ブロック」が政治イデオロギーのブロック（支配層エリートの私的所有と市場調整に対する姿勢）であると規定しています。あなたは，規範的にも理論的にも正の意味で，政治形態を重視しています。あなたの分析方法は，こういった点で独創的な政治経済学の手法です。この理解に同意していただけますか。

ヤーノシュ・コルナイ

「政治経済学」という表現は，いくつかの意味で用いられます。アダム・スミス，マルサス，マルクスといった私たちの学問分野の始まりの時代に戻ると，政治経済学というものは，マーシャル以来経済学といわれるすべてのものを包含していました。今日では，さまざまな学派が，自らが（大抵は自らだけが）政治経済学の真の擁護者であると名乗るための権利をめぐって競い合っています。これが，多くのマルクス主義経済学者が彼ら自身と同僚の思想家に対してとる見方であり，同様に，公共選択を分析する研究者集団によっても排他的な主張がなされています。

私自身は，「政治経済学」という表現を，社会主義システムに関する私の包括的な研究の副題に用いています。というのも，政治構造と経済活動の形態との強い結びつきを強調したいからです。その限りで，私は，古典的な，マーシャル以前の時代を思い起こしています。

政治経済学という概念を明確にすることを超えて，あなたの問いは二つの興味深い方向を示しています。一つは，「巨大なシステム」の歴史的起源とその発展についての因果分析です。私は，社会主義システムが1917年に帝政ロシアにおいて，政治領域の革命的変化の結果として発生したという認識に強く賛同します。ボリシェヴィキ党が政権を取り，唯一の政治的権威を確保し，社会と経済を急進的に変革し始めました。経済変革は，政治転換の後に続いたのであって，政治転換に先行したのではありません。近年生じたシステムの大変化に関する根本的な原因は，政治領域に求められるべきです。そうした思想は，私のたくさんの研究を確かに貫いています。

私はここまで，歴史を描写し説明する実証的ア

プローチについて解説してきました。これを，特定の「巨大なシステム」ないし調整メカニズムに元来備わっている特質をどのように判断するかという規範的な問いからはっきりと区別させてください。多くの経済学者が自明であるとみなしているのは，社会的「厚生」が最大の価値をもつということです。確かに，彼らはこのことを，より洗練された言葉でより正確に説明しようと試みています。つまり，私たちは厚生の絶え間ない増加のために懸命に努力すべきである，と。「厚生経済学」の代表的な論者たちがはっきりと自覚しているのは，速やかに生産量を増やして物質的厚生を高めることだけに注力してしまうことが分配の不平等を広げる可能性をもつことです。成長と平等の間にはトレード・オフの関係があります。厚生経済学者は，これら相反する価値の無数にある組合せについて議論します。

私の倫理的見解は，そのようなアプローチとは本質的に異なります。ここで選好順序理論の概念体系を使わせてください。究極の価値をめぐる私の選好順序は，文字通り辞書編纂的[ix]なのです。第一の価値に関わっているのは民主主義であり，それと密接に結びつく価値，例えば基本的人権の尊重といった価値です。これらの価値を放棄することは，有形財やより急速な成長，大きな厚生をもって相殺されるものではありません。民主主義の一部をGDPの力強い成長のために犠牲にする「値打ち」がある，といったようなトレード・オフはありません。

この文脈における，辞書編纂的な選好順序は，要するに次のような概念になります。私にとって，状況を査定するための第一の基準は，そこでは民主主義的な政治体制が支配的か，その体制が人権を尊重しているかどうか，です。そのような要件が当てはまる（またはおおよそ当てはまる）ならば，そこではじめて，二次的，三次的以降の価値基準を秤にかけます。つまり，査定がそうした地点に到達してはじめて，二次的，三次的以降の価値基準の間のトレード・オフについて検討することができるようになるのです。

本誌

社会主義からの転換の評価は，残念ながら未だに専門家の中ではほとんどなされていません[4]。その評価において，あなたは二つの尺度を用いています。長期の視点では，あなたはその経験を肯定的に捉えています。というのも，その経験は，大局的にみて西側の文明，資本主義，民主主義といった好ましい方向に向かっているからです。その一方で，短期の視点では，あなたはとても複雑な判断を下しています。「私は一つではなく二つの評価をもち続け，それらを混ぜ合わせたりはしません。一方の評価について，私は，世界の歴史という観点から，大きな成功を喜んで認めます。流血を伴わずに，信じられない速さで，従前よりも優れたシステムが作り出されました。他方の評価について，私は，日々生活における視点から，良い経験と悪い経験の一覧をもっています。それは，たくさんの喜びとたくさんの苦痛の一覧です。私は，以下の評価について，賢明で正当であると認められると考えます。すなわち，この地域で起こったことは，全世界の歴史上の意義という観点からみると成功ですが，同時に，多くの重要な側面においては失敗であると考えられるということです。なぜなら，とてもたくさんの人々がこの経験から苦痛，苦渋，失望を味わったからです」[x]。究極の，固有の，静的な評価を示すために単純に便益を加え費用を差し引くことはできないのです。ここで再び，矛盾とジレンマの重要性は，あなたを独創的な姿勢をもつに至らしめます。この姿勢は，一般に経済学者が変化を評価する伝統的な仕方とは対照的なものです。

ヤーノシュ・コルナイ

この論点は，私たちが対話の中で何度かふれてきたことと密接につながっています。それは，効用と選好順序の理論です。私が経済学者によって用いられる意思決定／行為モデルに異議を唱えるのは，私自身と他者の観察に依拠してのことなのです。ある大きな敗北，屈辱，苦痛を，別の成功，名誉，快楽が相殺するというのは，私たちにとってありえないことです。いくつもの「喜ばしい経験」と「苦しい経験」が入ったさまざまなパッケージに覆いをかぶせて，あら不思議！　同等の効用という価値に人々を誘導することができる。そのような無差別曲線などありません。演壇の後ろに引きこもり，自らの妄想で盲目になり，人間の本性を気にも留めない人々だけがそのようなことを信じることができるのです。無差別曲線が文学に通じている優れた小説家や読み手によって一瞬で信用されることはないでしょう。現代の心理学者はみな，どのような思想の学派に属していようと，経済学者が人間の幸せと不幸からなる経験をいかにモデル化するかについては落胆を隠せないでしょう。

個人の考えと感覚は，矛盾に満ちています。私は，何事かを望むと同時に，それが生じないようにといくらか願ってもいます。「われ憎しみ，かつ愛す」，カトゥッルスはそう言いました[xi]。私たちは，誰かやある思想を愛すると同時に憎むのです。さもなければ，私たちの内面で二つの非常に強い心のはたらきがせめぎ合う結果，今は一方が優勢であったとしても，いずれ他方が優勢になるでしょう。その例として，国家の利益対家族の利益，冒険を追い求めることに対し平和で平穏な生活を探し求めること，政治的に自ら働きかけるのに対し政治的に受け身になり，与えられた専門の課題に集中すること，が挙げられます。最終的に，何らかの発展があります。それは，相反する目標，努力，感覚同士の妥協であるか，ある側か別の側に傾くか，のどちらかです。そのような矛盾を決して許さない魂をもつ個人が存在するかもしれませんが，もちろんそういう人は滅多にいない種類の人です。

私の一連の考えは，主流派経済学の根本をなす教義に疑問を投げかけます。あなたが言及した私の論文は，次のような主張にもとづいています。すなわち，歴史的な大事件は，実際には，良くもあると同時に悪くもあり，進歩でもあると同時に新たな苦しみの元凶でもあるでしょう。人々は，その出来事の喜ばしい帰結と苦しい帰結を一度に（あるいはその大きさの変化を伴いながら）経験しているのでしょう。ですから，全体像（トータル）に到達するために有益な効果に対して正の符号をつけ，不利な効果に対して負の符号をつけることで「これらを合算する」のは無益な行いなのです。そうしたことに比べると，もし私たちが，良い出来事や悪い出来事といった異なるカテゴリーについてさまざまな評価をする代わりに，好ましい経験という評価と好ましくない経験という評価を根気よく続けたならば，それはすでに方法論上の進歩なのです（ここで洞察力ある読者は私の言い草が皮肉を帯びていることに気づくでしょう）。

読者に断っておきたいのは，私は，自伝でも異なる文脈においてではありますが，同じ根拠をもつ原則をもって，良い行いと悪い行い，道徳的な出来事と不道徳な出来事について評価をすることの問題を扱っています。私の自伝の中で，別の文脈においてですが，その問題は同じように原則に基づいて扱われています。ある人が人生のある局面においてしでかした間違いを，別の局面における人間性への貢献をもって正すことができるという考え方を私は信頼していません。私たちは，ここで少なくとも二つの評価を必要とします。一方の評価において，間違いは消えることなく残り続

けますが，他方の評価について，私たちはもちろん，可能な限り多くの，可能な限り有効な，良い行いをかき集めようと努力しなければなりません。

VI. 政体と経済

本誌

あなたは自伝のなかで，中国（そこでは『不足の経済学』の翻訳が非常に大きな成功をおさめました）への長きにわたる関心を述べています。その国の経験は，あなたの最初のアプローチの正当性を強く示してきました。そのアプローチとは，例えば，既存の国営部門の急速な民営化に対比されるものとして，新たな企業と民営部門の下からの出現を強調するものです。その一方で，中国はあなたが『社会主義システム』で記述した経路，つまり，改革が伝統的システムのもつ首尾一貫性を弱め，不安定性と危機に至るという経路をたどりませんでした。そのような経路は，体制転換前に中欧と東欧がたどった軌跡の特徴でありました。首尾一貫性の減退と不安定性は観察されてきましたが，ゆっくりとした改革がシステムの変化を引き起こしてきました。それには例外的な成長という記録と貧困水準の低下が伴いました。過去30年間に中国が辿った経路に，『社会主義システム』にみられる主たる図式に補足したり，それを変更する必要があると考えますか。

ヤーノシュ・コルナイ

その問いに答える前に，間もなくフランスの読者が入手できる私の自伝が中国で既に二度出版されていることにふれさせてください。まず，繁体字に翻訳されたものが2009年に香港で出版されました。これは，おそらくたくさんの読者には届いていないでしょう。というのも，教育水準の高い人しか繁体字での著作を読むことができないからです。そのうえ，香港は未だ部分的に閉ざされた区域です。香港から中華人民共和国の15億の住民に向けて本の販路を見つけようとすると必ず困難にみまわれるのです。たとえ多くの読者に行き届いていないとしても，強い反響がありました。主要テレビ局がそれを扱ったのです。経済学研究者の会議がそれを議論するために開かれました。その会議で，ある話し手は，私の研究についての知識を得ようとする読者は自伝から読み始めるべきであると薦めました。というのも，自伝は他の私の研究を理解するための鍵を提供するからです。それぞれの研究は，さまざまな歴史の時期に，言論の自由に関する制限がさまざまな中で書かれたからです。私は，この本と私の経歴に関するとりわけ興味深いコメントを見つけました。そのコメントは，自由な発想をする「反体制の」中国人によってインターネット上でなされていました。私に似た知的感覚の持ち主が存在していたのです。多くの人が，私がそうであったように共産主義を信奉する者として出発し，続いて彼らの生活のいくつかの点で初期の出来事に幻滅し，マルクス・レーニン・スターリン・毛沢東主義理論の鋭い批判者になりました。そうして各人は，それぞれのやり方で民主主義と市場経済のために闘いました。

二度目には，この本は簡体字の新訳として上海で出版されました。一般大衆が読むことができる書体で書かれたこの本は，中国本土の書店で販売されています。この本が出版されたのはごく最近，2013年8月です。私は反応が来ることをわくわくしながら待ち望んでいます。

私は，あなたが今しがた提起した問題についてたびたび考えています。中国は，お互いに相容れない，混合し難い諸要素から形作られた，独特なハイブリッド構成体です。隣り合って存在し，お互いに交わっているのが，一党独裁国家，その重さゆえにほとんど経済の足を引っ張っている広範

な国有部門，活発で力強い民間部門です。さきに私は，このように全く異なる要素が共生する中で，大きな摩擦がどのように生じるのかを強調しようとしました。しかし，経験が蓄積されたことでより明らかになったのは，それらの要素がどうにか共存できただけでなく，目覚ましい成長を生み出していることです。もし私に活力があれば，私は，これについてかつて議論したことを再考し，その結論を出版するでしょう。もし私の体力が尽きるならば，若い世代がその仕事を完成させるでしょう。私が待ち望んでいるのは，誰にもましてハーバード大学での私の教え子である中国人がその仕事を完成させることです。その中国人は現在，中国において高い学術的地位を得ています。歴史的経験に照らして私の思想を含む従来の理論を再検討する研究が，すでに準備されています。

私は，考え抜かれた見直しが理にかなっており必要であると考えています。それでも言い足したいのは，歴史的時間が中国においては異なる単位で測られることです。最小単位はひと月でなく，一年ですらなく，十年です。確かに，このハイブリッドな社会経済のかたちは，急激な成長を伴って共存してきました。実際，まさにこの奇妙な混合こそ，中国の非常に驚くべき成長を駆り立ててきたものでしょう。とはいえ，その速度は低下しているように思われます。私の友人である中国人は，このシステムの内部対立が悪化しつつあることを指摘します。経済及び一人当たり生産量が成長しているので，その結果，それらのことが釣り合いのとれた消費増を求めるのです。相変わらずほとんどの者は，価格と賃金の制御，そして賃上げ要求の抑圧による実質賃金の抑制という方策を容認しないでしょう。とはいえ，極めて低い賃金費用が，中国の輸出が急増したことの背後に隠された一つの秘密でした。このようなマクロ経済の割合，すなわち付加価値の概ね半分が投資され，その残り半分だけが消費に回るという状態を永久に維持することは不可能です。

この緊張は，経済においてだけでなく，政治の領域でも同様に高まっています。困難であるか，ほぼ不可能なのは，最新の生産方式を導入し，何百万人でコンピュータを生産し，一億人によるインターネットの接続を許容し，その一方では，人民の発言を弾圧し，彼らの自由の拡大を抑制することです。スターリンがソビエト圏をほぼ密閉し，破滅をもたらす外国の情報が有刺鉄条網と地雷原によって食い止められた時代など，今やどこにあるのでしょう。中国の緊迫した状況が破裂するときを誰が知っているでしょう。おそらくどのみち，長期において（「長期」は数十年で測られます）一党体制，国家＝党による独裁，中央集権は，自らの現代技術を導入しそれを絶えず更新する自由企業によって推進される，分散的な市場経済と並んでは維持され得ないでしょう。

実際の歴史的発展の見通しに関する私の見解は，似たような傾向の可能性を検討することによって補完されます。その見解は，実証分析の領域においてはこれまで通りです。しかし，規範的アプローチのもつ厳しいジレンマから手を引いてはなりません！　たとえ成長が劇的には落ち込まなかったとしても，私たちは次の問いから目を背けることはできないでしょう。どれだけの成長率を上乗せすれば，人権，表現の自由，集会の自由，政治における別の政治的可能性の中から選択する権利，が犠牲になっても構わないのでしょうか。私たちは，つい今しがた私の見解について議論しました。すなわち，私のいう価値のシステムにおいて，民主主義と基本的人権の擁護は最上位にあるのです。それらが欠けているならば，いかなる成長率も埋め合わせをしません。私は，次のような西側の実業家と学術研究者の話を聞くと反感を抱きます。彼らは，中国の経済実績のことを嬉しそうに口に

し，それから傍観者のように，「ええ，まぁ，中国では共産党が集中した政治権力を保持したままですがね」と付け足します。続けて彼らは，民主主義が西側のぜいたくの一種，つまり裕福なアメリカ人とヨーロッパ人の権利だと言い足すことによって自らを落ち着かせようとし始めます。それは，中国人がようやく十分な食糧を得て頭の上にきちんとした屋根を据え付けることにどれだけ喜んでいるのかを見よ，ということなのです。そういった実業家や経済学者はどのような種類の政体が権力の座にあるのかは気にしません。

そう，分かるでしょう。欲求は食べることと共にやってきます。人口の物質と文化の水準が上昇すると，すなわち人々が小さな自由を味わうと，民主的な制度の要求が高まるのです。

本誌

あなたは自伝の中で，専門的，倫理的，個人的な理由から，1956年以降の政治に参加するのではなく，原則的に，学者つまり科学の人であり続けるという長きにわたる信念を力説します。あなたは助言者の立場に指名されることを意図して避けてきました。ハンガリーにおける社会主義の末期においても，社会主義後の推移においてもそうです。それにもかかわらず，あなたは，重要な局面において自らの提案を表明してきました。1989年11月に初めて出版された『経済的移行のための感情的ビラ』*Passionate Pamphlet in the Cause of Economic Transformation* のようにです[5]。移行期においてもそうです。近年あなたは，ハンガリーのオルバーン政権に反対する強い姿勢を公式にとってきました。それは，経済政策への懸念を示すだけでなく制度改革と民主主義という政治問題への懸念を示すものでもあります。あなたの国における最近の動向は，その目にどれほど深刻に写りますか。

ヤーノシュ・コルナイ

先ほど私は，ケインズの公人としての役柄に敬意を示す一方で，彼の役柄と私自身の在り方を切り離して考えるという話をしました。このときに，この質問の前半におおよそ答えました。私は実際，システムが変化して以来，経済と政治において何がなされるべきかについての見解を，何度か表明してきました。私がこのことに熱心になるのは，提案を作成するよう要請されることなく，もっぱら自分の意思にもとづいて提案を作成し始めるときです。私が見解を表明したのは，あなたが示した例のとおり，1989年に『感情的ビラ』を書いたときです。この著作は，ハンガリーにおける包括的な改革プログラムを提案するもので書籍のかたちになった最初の研究でした。

10年後，私は，東欧の医療分野を改革する方法について複数の本を書きました。初版を私が一人で書き，次に第二版を，卓越した医療経済学者であり，かつての私の教え子であるカレン・エッゲストンと力を合わせて書きました。強力な国家による再配分と政治勢力は，温情主義の福祉国家を構築します。こうした要素をもつ多様な資本主義がある種の症状を起こすのは避けられません。この症状は，社会主義下での不足経済において良く知られる現象と似ています。国家は，医療費の大半を税収で補填することを引き受けます。それによって，資本主義市場経済という海に浮かぶ，ある種の「社会主義的」孤島がつくられるのです。この島には，見慣れたものがみなあります。それは，例えば，待機行列，長い待ち時間，医療機関と患者のお役所的な関係です。医療機関のなすがままなのです。私が体制転換後の東欧，スウェーデンやイギリスにおける医療分野を研究し始めたとき，鋭い洞察力など必要とせずに，自分が慣れ親しんだ分野にいたことに気づきました。不足の経済に特化してきた研究者は，無料の医療サービ

スという環境に親しみを覚えるのです。

あなたの質問に戻りましょう。場当たり的な経済政策の事案に口出しすることについてです。私は，包括的な改革プログラムを引っ提げていたときでも，医療改革がテーマのときでも，自らの提言と助言を論説にしたためました。けれども，それで止めにしました。私は，自らの提言書を通すための「ロビー活動」をしたり，自分が正しいと説得するために大臣たちやその代表者を探し求めたりしませんでした。その代わり急いで研究に戻ります。私は早く次の研究プロジェクトを進め，また新しく結論を出したくてたまりません。しかもその結論を出す場は，活字のうえでありたい。どうやら私のこの習性は直らないようです。

オルバーンが 2010 年に政権についてからのこの国で起こった変化に，私は非常に強い関心をもっています。政治情勢の変化のあと 2，3 か月たたないうちに，私は，「棚卸（Taking Stock）」と題する，日刊紙に載った長大な論説の中で率直な意見を述べました。この研究で指摘したのは，民主主義を毀損すること，とくに抑制と拮抗のシステムを一掃することが孕む大きな危険です。一年後，私は，「集中化と資本主義市場経済」“Centralization and the Capitalist Market Economy” (2012)と題した，それに類する第二の研究を公表しました。この研究には，二回目の警告信号としての意図をもたせました。私が半世紀以上も前，1959 年の本『行き過ぎた中央集権化』*Overcentralization*[6] で書いた現象が，どのようにしてまたも生じたかを考えるのは，苦々しい経験でした。社会主義という政治枠組みの内側で数十年の間に起きた変化と，1989 年から 1990 年の大転換のあとでその枠組みを超えて起きたさらに多くの変化は，すべて同じ一つの方向を指していました。それは，独裁制から民主制の創出と充足へ，命令にもとづく統制から市場における契約へ，官僚制と温情主義から個人の自律と自足へ，という方向です。オルバーン政権がこの方向に進み続けるのではなく後戻りしているのを見るのはつらいことです。この政権は，専制政治，私有財産の国有化・制限・迫害，集中化，温情主義へと後戻りし，しかもこの国をそれらへと後戻りさせているのです。ハンガリーにおける知識人階層の多くと同様，私は，抗議の声をあげる義務を感じています。それぞれが自由に使える手段をもってそうします。私の手段は，言葉を語り，活字にすること，状況を公平に評価すること，予期される重大な危険を警告することです。

注

1 Kornai (2000).

2 首相または財務大臣として二期を務めた人たちを二重にカウントした。

3 ハンガリーは，三つの時期に，共和制の国のかたちを意味する形容語句を採用した。ハンガリー第一共和国は 1918 年から 1919 年まで，第二共和国は 1946 年から 1949 年まで存続した。第三共和国は 1989 年に公布された。2012 年の新「基本法」はオルバーン政権によって公布された［2011 年に可決・公布，2012 年 1 月 1 日に施行――訳者注］。基本法は，共和国の語を国名から削除し，それによって法令上，第三共和国を終わらせた。この推移は，それよりいくらか前に，共和制の理念の抑圧，民主制の諸制度の崩壊，それらの置換から事実上始まった。かつて共和制と民主制の理念と制度が占めた位置に，代わって専制政治が制度として構築された。

4 Kornai (2006b).

5 アメリカの版では Kornai (1990a)，フランスの版では Kornai (1990b).

6 Kornai (1959).

書誌

ヤーノシュ・コルナイによる研究のリスト

Kornai J. (1959), *Overcentralization in Economic Administration*, Oxford, Oxford University Press.

—— (1971), *Anti-Equilibrium*, Amsterdam, North-Holland（岩城博司・岩城淳子訳『反均衡の経済学』日本経済新聞社，1975年）.

—— (1980), *Economics of Shortage*, Amsterdam, North-Holland (*Socialisme et économie de la pénurie*, Paris, Economica, 1984).

—— (1990a), *The Road to a Free Economy. Shifting from a Socialist System: The Example of Hungary*, New York, W. W. Norton (edition in Hungarian, *Passionate Pamphlet in the Cause of Economic Transformation*, 1989; *Du socialisme au capitalisme. L'exemple de la Hongrie*, Paris, Gallimard, 1990b)（佐藤経明訳『資本主義への大転換：市場経済へのハンガリーの道』日本経済新聞社，1992年）.

—— (1992), *The Socialist System. The Political Economy of Communism*, Princeton NJ-Oxford, Princeton University Press-Oxford University Press (*Le système socialiste. L'économie politique du communisme*, Grenoble, Presses universitaires de Grenoble, 1996).

—— (1995), *Highway and Byways. Studies on Socialist Reform and Postsocialist Transition*, Cambridge MA, MIT Press.

—— (1997), *Struggle and Hope. Essays on Stabilization and Reform in a Post-Socialist Economy*, Cheltenham UK, Edward Elgar.

—— (2000), "The System Paradigm", in W. Scheckle et al. (eds.), *Paradigms of Social Change: Modernization, Development, Transformation, Evolution*, Frankfurt/New York, Campus Verlag (« Le paradigme systémique », in J. Kornai, *La transformation économique postsocialiste*, B. Chavance et M. Vahabi (eds.), Paris, Éditions de la Maison des sciences de l'homme, 2001).

—— (2001), *Welfare, Choice, and Solidarity in Transition* (with Karen Eggleston, 2001), Cambridge, Cambridge University Press.

—— (2006a), *By Force of Thought: Irregular Memoirs of an Intellectual Journey*, Cambridge MA - London, The MIT Press (*À la force de la pensée : Autobiographie irrégulière, trad. du hongrois par J. et P. Karinthy*, L'Harmattan, Coll. « Pays de l'Est », 2014, à paraître)（盛田常夫訳『コルナイ・ヤーノシュ自伝——思索する力を得て』日本評論社，2005年）.

—— (2006b), "The Great Transformation of Central Eastern Europe. Success and Disappointment", *Economics of Transition*, 14 (2).

—— (2008), *From Socialism to Capitalism*, Budapest, Central European University Press.

—— (2011), "Taking Stock", Népszabadság, Budapest, January 7; also published in *American Interest*, January 6.

—— (2012), "Centralization and the Capitalist Market Economy", Népszabadság Online, Budapest, February 1, published in English, *Economics of Transition*, 20(4).

—— (2013), *Dynamism, Rivalry, and the Surplus Economy*, Oxford, Oxford University Press.

訳者付記

本稿は，János Kornai et Bernard Chavance, "Irregular Memoirs of an Intellectual Journey: Questions about the State of Economics. An interview with János Kornai," *Revue de la regulation*, n° 14 (2e semestre / Autumn 2013) の全訳である。原文のイタリックは傍点に，太字はそのまま太字とした。ただし，ラテン語出自のイタリック，及び，冒頭で書かれているインタビューイーの略歴（原文では全てイタリック）については，その限りではない。

聞き手のベルナール・シャバンス氏は，社会主義体制の分析，次いで移行経済の分析をレギュラシオン理論にもとづいて行うとともに，進化や制度に着眼する経済学についての研究を進めてきた。コルナイ『自伝』の仏訳書のなかで，氏は序文を執筆している。

氏が本稿を日本の読者に邦訳という読みやすいかたちで届けたかった理由は，本稿が日本の読者に対して以下の三つの意義を有しているからである。第一に，本稿は，コルナイ経済学の「入門の入門」である。なぜなら，本稿は，コルナイ経済学の入門書といえる長大な『自伝』の核心を，簡潔にまとめているからである。第二に，「経済学の状況」，つまり特定の経済学が学界の覇権を掌握していく傾向に対するコルナイ氏の見解を示している。とりわけ質問2「主流派と多元主義の要求」は，日本の読者にとって，経済学分野の参照基準に関する問題を考える材料になろう。第三に，日本の隣国である中国について，コルナイ氏の最近の見解を知ることができる。

シャバンス氏の主要著作は，以下の通り。*Le système économique soviétique: de Brejnev à Gorbatchev*, Paris, Nathan, 1989（斉藤日出治訳『社会主義のレギュラシオン理論――ソ連経済システムの危機分析』大村書店，1992年）. *Les réformes économiques à l'Est: de 1950 aux années 1990*, Paris Nathan, 1992（斉藤日出治，斉藤悦則訳『システムの解体――東の経済改革史 1950–90年代』藤原書店，1993年）. *Marx et le capitalisme: la dialectique d'un système*, 2° édition revue, Paris, Armand Colin, « Cursus », 2009. *L'économie institutionnelle*, 2° édition revue, Paris, La Découverte, « Repères », 2012（宇仁宏幸，中原隆幸，斉藤日出治訳『入門制度経済学』ナカニシヤ出版，2007年［2007年初版の訳］）.

なお，シャバンス氏には，訳者の度重なる質問に一つひとつ丁寧に回答していただいた。厚く御礼申し上げる。氏とのフランスでの打ち合わせについて，JSPS科研費26285048の助成を受けた。また，翻訳の過程で，里上三保子氏（京都大学）・柳原剛司氏（松山大学）・中原隆幸氏（阪南大学）・加藤浩司氏（京都大学）の協力を得た。ここに記して深く感謝する。もちろん，翻訳の質とありうべき誤りの責任はすべて訳者が負っている。

訳注

i 邦訳は，2005年に日本評論社から，盛田常夫訳『コルナイ・ヤーノシュ自伝――思索する力を得て』として出版された。なお，本インタビューの中でこの自伝から引用されている箇所については，基本的に邦訳にしたがったが，一部変更した。

ii Kornai (2006a, p. 194, 邦訳 199ページ).

iii Weber, M. (1920) "Die Wirtschaftseithik der Weltreligionen," Einleitung, in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, Tübingen, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), みすず書房1977年発行，S. 252. 林武訳「世界宗教の経済倫理」序説，『ウェーバー　宗教・社会論集』河出書房新社，1988年，130ページを若干の修正のうえ引用。

iv Keynes, J. M. (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*, London, Macmillan, p. 383. なお，訳にあたっては，間宮陽介訳『雇用，利子および貨幣の一般理論（下）』岩波文庫，白145–2，2008年，194ページ，及び，山形浩生訳『雇用，利子，お金の一般理論』講談社学術文庫，2012年，508ページを参考にした。

v 岩淵達治訳『三文オペラ』，岩波文庫，赤439–1，2006年，152ページ。

vi 「ソフトな予算制約」は，社会主義体制の枠組みで機能している国営企業の経営のあり方に関わる概念であり，「ハードな予算制約」と対比される。「もし支出が収入を超え，資金的予備も枯渇したとすれば，どうなるだろうか。二つのことが考えられる。ひとつは，企業をそのまま放っておく。予算制約はハードで，企業が継続的に損失を続け

いずれ倒産する。もうひとつは，上部機関[illegible]けに駆けつけ，企業を救済する。この後者の場合，予算制約はソフトで，支出を制約することはない」（Kornai, 2006a, p. 257，邦訳 263 ページ）。

vii Hirschman, A. O. (1981) *Essays in Trespassing: Economics to Politics and Beyond*, Cambridge, New York, Cambridge University Press, p. 20.

viii Kornai (2013) として出版済。

ix 辞書編纂的とは，「まず最優先の属性に関して最良の選択肢を選ぶ。この最良の選択肢が複数あるときには 2 番目に優先する属性に関して最良のものを選ぶ。同様のことを繰り返す選択方法」である（マイク・ラヴォア著『ポストケインズ派経済学入門』宇仁宏幸・大野隆訳，ナカニシヤ出版，2008 年，41 ページ 訳注）。

x Kornai, J. (2005) "The Great Transformation of Central Eastern Europe: Success and Disappointment," the 14th World Congress of the International Economic Association in Marrakech, Morocco on August 29, 2005, p. 36.

xi 中務哲郎・大西英文(1986)『ギリシア人ローマ人のことば――愛・希望・運命』岩波書店（岩波ジュニア新書 107），10–11 ページ。なお，続きは以下の通り。「君問わん，いかにしてそれを為(な)し能(あた)うや，と。われも知らず，ただ心にそれあるを覚(おぼ)え，苦しむなり。」

（ヤーノシュ・コルナイ
コルヴィヌス大学・ハーバード大学名誉教授）
（ベルナール・シャバンス
パリ第 7 大学名誉教授）
（訳：きたがわ　こうた　　京都大学大学院）